

# 〈主体〉の構造と類型 1

村 上 直 樹

**要旨** 〈主体〉については、これまで様々な議論が展開されてきた。ウェーバーによるプロテスタンティズムの倫理と〈主体〉の形成についての議論、イデオロギーによる〈主体〉化のプロセスとしての「呼びかけ」に関するアルチュセールの議論、牧人＝司祭による〈主体〉の形成を分析したフーコの権力論などが、その代表と言えよう。また、いわゆるポスト近代社会についての考察では、上記のような議論における〈主体〉の衰微が論じられ、それにかわる新たな〈主体〉＝ナルシスのな〈主体〉（あるいは病理的ナルシス）の台頭が分析されている。本稿の課題は、〈主体〉に関するこうした様々な議論を、一つの統一的な枠組みの中で整理し、体系的な〈主体〉の類型学を構築することにある。本号では、整理のための枠組み——ラカニアン「構造化する運動」に関する枠組み——が呈示される。

## I. 課 題

【1】個人の行為を対象とする領域及び自己論の領域において、これまで様々な主体概念あるいは主体の類型が提出されてきた。しかし、現在の時点で、それらの間の関係は十分に検討されているとはいいがたい。主体概念は様々な文脈において、様々な意味合いで使用されている。ただ、乱暴に言えば、従来の主体概念は大きく二つに区分できるように思われる。一つは、行為、思考、言表行為の起源点としての主体であり、もう一つは、指示対象としては生身の個人を指し、その行為のあり様によって規定される主体である。前者は直接観察することはできないが、後者は具体的な個人として観察することができる。具体例を挙げよう。例えば、次のフーコーの文章に出てくる主体は前者の主体である。

・・・言語はもはや言説ではなく、何かの意味の伝達ではなくて、生な実体としての言語の開陳、露呈された純粋な外在性なのであり、話す主体はもはや言説の責任者（つまりその言説をささえ、その中において明言しかつ判断し、ときにはこの目的のためにしつらえられた一個の文法形態のもとに自己を表明する人）であるよりは、非存在、その空虚の中において言語の無際限な溢出が休みなく遂行される非存在なのである。（Foucault, 1966＝1978, p. 14）

ここにおいては、言表行為の起源点としての主体が実体的な項あるいは基体ではなく、言葉の無限の変換が繰り返される空虚な場所であることが指摘されている（cf. 坂部, 1979, p. 365）。このような主体は観察不能であるが、フーコーは直接観察することのできる主体、つまり、後者の主体についても議論を展開している。彼の権力論で論じられた主体、あるいは晩年の仕事において取り上げられた美学的＝倫理的な実践による主体は後者の主体であ

る。マックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で分析した禁欲的な主体、アルチュセールが問題にしたイデオロギーの作用によって形成される主体も後者の主体である。本稿の課題は、このような（後者の）主体概念あるいは主体の類型を一つの統一的な枠組みの中で整理し、体系的な主体の類型学を呈示することにある。

【2】我々が依拠するのはラカニアン「構造化する運動」に関する枠組みである。なおこの枠組みにも主体 *le sujet* という概念が使われているが、この主体概念は先の区分に従えば前者の起源点としての主体である。よって、区別のため、以後、主題とする（後者の）主体を〈主体〉と表記し、枠組みにおける主体は単に主体と表記するかラカニアン<sup>(1)</sup>の表記法に従って△あるいは8などと記すことにする。

我々がまだ評価の定まっていないラカニアン<sup>(2)</sup>の理論を持ち出すのは、そこに我々の作業—〈主体〉の類型学—にとって必要な道具立て（主体、想像的自我、象徴的自我、自我理想、理想自我、超自我、欲望、享樂、ファンタズム etc.）が揃っているからである。ただ、そうした道具立てがラカン自身あるいは彼に続くラカニアン達によって、相互に関連づけられ、体系化されているわけではない。本稿で呈示される枠組みは、我々によって構成された暫定的なものにすぎない。あるラカニアンは自らの著作の冒頭に「理解にご用心！ Gardez-vous de comprendre！」というラカンの言葉を掲げている。とりわけラカンの理論についてはこの教えの意義は大きいであろう。しかし、今回は現時点でのとりあえずの理解にもとづいて枠組みをまとめることにした。<sup>(3)</sup> ラカンを理解するということは、テキストを創り出すこと、再構することであるという見方もあるからである（石田, 1992, p.viii）。

なお、枠組みを構成するにあたっては、特に藤田博史と小出浩之の著作を参考にした。彼らの仕事から必要な枠組みをそのまま直に取り出すことはできなかったが、彼らの仕事を読むことによって、我々は初めて他のラカニアン<sup>(4)</sup>のそしてラカン自身の（往々にして秘教的な）著作にアクセスすることが可能になった。

【3】整理の対象となる主な〈主体〉は以下の通りである。前述のフーコー、ウェーバー、アルチュセールによる〈主体〉。安丸良夫が近世末期の荒村に見いだした通俗道徳を内面化した〈主体〉。小此木啓吾が自己愛人間と呼ぶ現代のナルシス的な〈主体〉。なお、これらの〈主体〉に関する二次的な議論も随時参照されるであろう。

## Ⅱ. 枠組み——主体と自我

【4】〈主体〉は主体（△, 8）の「構造化する運動」によって生成する。より正確には（後述する）「自我の確認検査」としての「構造化する運動」が起きている個体が〈主体〉である。ここでは、まず、「構造化する運動」の前史とも言うべき「鏡像段階」における自我の形成について述べる。ラカニアン<sup>(5)</sup>の理論においては、鏡像段階の前にいわゆる「寸断された身体」*le corps morcelé* (Lacan, 1949 (1966), p. 97=1972, p.129) の段階が想定されている。しかし、論者によっては、この「寸断された身体」の段階の扱いが異なる。例えば、小出浩之は人間は動物のように環境に十全に適合できる過不足なくまとまった本能を授かって生まれてくるのではなく、バラバラの無政府的欲動に衝き動かされる「寸断された身体」をもってこの世に生まれてくるとする（小出, 1990, p.53）。つまり、人間は出生時から「寸断された身体」の段階にあると考えるわけである。これに対して藤田博史は、「寸断された身体」の前史と

して、主体と〈母〉の未分化の段階及び主体が欲求の領域から欲望の領域に移行するフェーズを想定する。この移行によって、バラバラの欲望の寄せ集めとしての「寸断された身体」が形成されると考えるわけである（藤田, 1990, pp. 39～41）。本稿では後者の見解に従う。その理由は、出生時から「寸断された身体」を想定すると、後述の対象  $a = \langle \text{もの} \rangle$  das Ding（フロイト）の位置付けができなくなるからである。

さて、人間はその出生時の未成熟性（例えば、錐体外路系の未発達）に起因する「寄る辺なさ」Hilflosigkeitにより、生まれると同時にその絶対的な無力をあらわにする（Freud, 1926=1969, pp. 264～265/Lacan, 1949(1966), p. 96=1972, p. 129）。そして、その無力さを補完するのが「原隣人」としての〈母〉であり（南, 1993, p. 77）、この〈母〉が主体に最初の満足体験をあたえる（南, 1991, p. 178）。この「原隣人」=〈母〉は、生まれたばかりの幼児にとっては心的距離 0 の存在であり、自己性を帯びている（小出, 1991, pp. 177～178）。幼児はこの「原隣人」=〈母〉との関係において、欲求の領域から欲望の領域に足を踏み入れ、そのつど部分的な対象を手に入れつつ、様々な解剖学的器官と結びつき、バラバラの欲望の寄せ集めとなっていく（藤田, 1990, pp. 40～41）。そして、この「寸断された身体」の成立と平行して、「原隣人」=〈母〉は幼児と分極していく。「原隣人」=〈母〉は主体と未分化の段階から、主体にとっての対象の段階に（主体にとっての自己性を残しながら）移行するのである。

鏡像段階とは、ラカンの表現によれば、「寸断された身体像から、そのまとまりから我々が整形外科的と読んでいるような一つの形態へ」（Lacan, 1949(1966), p. 97=1972, p. 129）移行していくような段階である。<sup>(6)</sup>それは「鏡像に関心を示す生後 6 カ月から 18 カ月までの幼児」というよく知られた場面を含むストーリーである。ただ、鏡像は必ずしもガラスでできた本当の鏡である必要はない（Margulis & Sagan, 1992=1993, p. 219）。そうでなければ、鏡のない世界には鏡像段階は存在しないことになる。実質的には（小）他者 *autre* のイマージュが鏡像の機能を果たす。（小）他者とはこの場合、主体にとっての対象となった〈母〉である。鏡像としての（小）他者=〈母〉のイマージュによって、主体はみずからが身体であることを（視覚的に）知り（Lacan, 1975, p. 192=1991b, p. 16）、「寸断された身体」にかわるまとまりを持った身体像を得る。この身体像が最初の自我=想像的自我 *moi imaginaire*（藤田, 1993c, p. 149）であり、その形成過程が鏡像段階である。主体がこのような自我を持つようになるということは、主体が身体に対する想像的支配を確立したということであって、この支配は身体の運動能力の統合=現実的支配に先立つ（Lacan, 1975, p. 93=1991a, pp. 127～128）。

鏡像段階において、自我が主体の外部=他我を起源として形成されることは、シニフィアンの世界における  $S$  の欲望が「他者の欲望」として発現するほかないこととともに人間の根本的な疎外をなす。<sup>(7)</sup>

ところで、かつては心的距離 0 の存在として主体に最初の満足体験を与え、鏡像段階においては、主体に最初の自我をもたらす（小）他者=〈母〉は主体の愛の対象 *l'objet d'amour* である。主体はこの（小）他者=〈母〉との（自己愛的な）想像的同一化を企てる。この段階において、主体は「〈母〉（へ）の欲望」*le désir de la mère* の貯蔵庫であると言える。そして、この「〈母〉（へ）の欲望」は〈母〉の  $\varphi$ （想像的ファルス）でありたいという「存在形の欲望」として発動する。 $\varphi$ とは、幼児が空想する〈母〉の欲望の対象である。つまり、

〈母〉が抱く欲望は一〇であり、主体はそれに応じて、その欲望の対象Φたろうとするわけである(藤田, 1993c, p. 250). 主体はこの「存在形の欲望」のもとに、〈母〉への「全体的な想像的投射」を行なって、想像的同一化を遂行する(藤田, 1993c, p. 240).

ただ、この(小)他者＝〈母〉と主体との関係＝想像的關係は安定的なものではない。それは、「悪無限的に連動的、このうえなく不安定かつリスクである。」(大庭, 1986, p. 19) なぜなら、主体と鏡像としての(小)他者との間にどちらが本物でどちらが複製かという対抗意識が生まれるとともに(Gallop, 1985=1990, p. 72), 想像的關係においては、満たされない欲望に起因する緊張は相手の中に体験されるからである。この緊張は、鏡像の破壊以外に出口はない(Lacan, 1975, p. 193=1991b, p. 17). しかし、鏡像を破壊すれば、「寸断された身体」の苦悩に逆戻りしてしまう。よって、このデュエル duelle (双数的=決闘的)な関係は持続することになる。自己承認と他者廃棄の支配する情念的閉鎖回路＝想像界は回り続けるわけである(藤田, 1990, p. 43).

【5】不安定かつリスクな想像的關係からの出口を主体にもたらす契機が「原抑圧」である。<sup>(8)</sup> 原抑圧とは、主体が〈母〉のΦであることを諦めることである(小出, 1993a, p. 160). この原抑圧によって、主体の「〈母〉(へ)の欲望」は断ち切れ、その対象をシニフィアンにすり替えられてしまう。主体は欲望の言い換えとしてのシニフィアンの連鎖の中に巻き込まれてしまうわけである(藤田, 1990, p. 116). この過程をもう少し詳述しよう。

原抑圧は主体が〈母〉の欲望を司っているものの存在を認めることによって<sup>(9)</sup>はじまる。あるいは、〈母〉を動かしているものを名付けることによって<sup>(10)</sup>はじまる(この命名が「父の名の隠喩」である)。これは言い換えると主体にとっての最初のシニフィアンΦ(象徴的ファルス)が成立した、あるいは、主体がΦを所有したということである。Φは〈母〉の欲望を司る「父の名」Nom-du-Pèreのシニフィアンである(藤田, 1993b, p. 38). つまり、主体は〈母〉のΦでありたいという存在形のフェーズから、〈母〉の欲望を司るΦを(〈父〉のように)所有するというフェーズに移行するのである。「父の名」としてのΦは「父のノン」Non-du-Pèreでもあり、この「ノン」＝禁止によって、想像的な母子間の欲望の交流は断ち切られる(藤田, 1993b, p. 38).

ところで、「〈母〉(へ)の欲望」の貯蔵庫たる「生の主体」le sujet brut<sup>(11)</sup>＝△に刻まれた最初のシニフィアンΦ＝S 1は2番目以降のシニフィアンS 2に連鎖し、意味を生成させると同時に自身はエスの中に押さえこまれ(狭義の原抑圧)、無意識という心的領域が形成される。また、この時、主体はS 1－S 2の連鎖によって生じた意味にすり替えられる(アファニシス＝欲望する主体の消失)。しかし、意味にすり替えられたのちにも主体は本来の欲望する主体としてとどまる。つまり、主体はシニフィアンの連鎖にとらわれた主体(言表の主語)と欲望の対象をめざす主体(言表行為の主体)に分裂するのである(S＝分裂した主体の形成<sup>(12)</sup>).

【6】欲望するSの対象は、△にΦ＝S 1が刻まれる際に永遠に失われる対象であり、<sup>(13)</sup> ラカンはそれを対象aと名付けている。対象aとは、原抑圧以前の主体＝△の愛の対象であった〈母〉であり、個体の歴史の始原においては、自己性を帯びていた(心的距離0の)存在である。つまり、それは「もうないものとしてのかつての自分」(新宮, 1990, p. 7)でもある。主体は始原において「最初の満足体験」を与えてくれるこの自らの半身との「神話めくり合い」(向井, 1988, p. 138)をするが、シニフィアンの世界＝象徴界に参入する際に<sup>(14)</sup>

それはどうしようもない形で失われてしまう。象徴界に入ることによって、主体は自己の「真の存在」を失うわけである（向井, 1988, p. 145）。加藤敏はこの喪失によって主体が被っている状態を「構造的メランコリー」<sup>(15)</sup>と呼んでいる（加藤, 1991, p. 9）。

さて、失われた対象 a を見出すことが、分裂した主体 = S の追求する道である。S は対象 a と関係を結ぶことによって「存在」を得ようとするわけである。しかし、対象 a はシニフィアンの網目の向こう側、つまり現実界に属するものであり、シニフィアンの世界に入ってしまった S がそこに到達することは不可能である。<sup>(16)</sup>「対象 a は不可能な対象であり、かつその不可能さが、それを永遠に追い求める、そしてけっしてそれには到達できない欲望を構成する」（石田, 1992, pp. 122～123）のである。対象 a は欲望の対象であるとともに欲望の原因でもある。そして、対象 a に欲望をかき立てられた S はそれには決して到達することなく、対象 a のルアー（騙し餌）であるシニフィアンを次々と掴み続ける。シニフィアンの世界 = 象徴界 = （大文字の）他者 A において、対象 a を求める S の欲望はシニフィアンを求める「他者の欲望」にすり替わり、<sup>(17)</sup>最終的に満たされることなく、シニフィアンの連鎖を横切り続けるのである（藤田, 1993a, p. 141）。このような事態について、ラカンは「主体は欲望の対象を求めはするが、決してその対象そのものへと至ることはありません。・・・主体は代わりの対象以外は決して見出すことはできません」（Lacan, 1981, pp. 97～98 = 1987a, pp. 139～140）と述べている。「代わりの対象」とはもちろんシニフィアンであり、このシニフィアンという（大文字の）他者によって、S の根源的な存在欠如は補填されているのである（藤田, 1993c, p. 309）。

なお、S がシニフィアンの連鎖を横切り続ける結果として生じる意味作用において、S は断続的にアファニシス（あるいはフェーディング）を繰り返すことになる。<sup>(18)</sup>つまり、象徴界においてシニフィアンを手繰り、意味を生成するという「構造化する運動」の中で、S は意味として（あるいは言表の主語として）出現する一方、欲望の主体としては断続的に消失するのである（佐々木, 1984, pp. 85～91/藤田, 1990, pp. 55～59）。S は欲望の主体として消失し続けることによって（あるいはシニフィアンに殺害され続けることによって）、<sup>(19)</sup>象徴界の中で生き延びていくことになる。

【7】S が対象 a を求めて次々とシニフィアンを掴み続ける運動（「構造化する運動」）は周知のようにラカンによって  $S \diamond a$  とアルゴリズム化されている（藤田, 1990, p. 32）。これは人間のファンタスムを表現したものでもあり（Lacan, 1963(1966), p. 774 = 1981, p. 269）、 $\diamond$  は対象 a を目指す S の運動に対するシニフィアンの抵抗あるいはクッションを表現している（小川, 1993, p. 41）。 $\diamond$  の部分を書き替えると次の式が得られる： $S \rightarrow S_1 \rightarrow S_2 \rightarrow a$ （ $S_1$  は最初のシニフィアンとしての  $\Phi$ 、 $S_2$  は二番目以降のすべてのシニフィアンを指す）。対象 a に欲望をかき立てられた S は対象 a に辿り着くことなく、そのルアーたるシニフィアンを掴み続ける。すなわち人間はファンタスム（幻想）の中に生きるわけである。「ファンタスムは、われわれがそれを通して世界を一貫して意味のあるものとして経験できる枠組み」（Žižek, 1989 = 1992, p. 221）であり、「ファンタスムによってわれわれは、一つの舞台の上の役者としての生活を送る」（向井, 1988, p. 216）。「ファンタスムによって、言葉を持つ生物たちは、自らが《生》と名づけているもののなかで暮らす」（Lacan, 1974 = 1992, p. 95）のである。また、このファンタスムは、各個体に固有のものである。<sup>(20)</sup>つまり、どのようなシニフィアンが対象 a のルアーになるのかは、個体差がある。「もしファンタスムに、 $\diamond$  が

あるとすれば、一人ひとり、各自に固有の本来的な◇を持ち、またそのひとに属するものなのである。主体と同じだけのファンタズムがある」(Clément, 1981=1983, p. 231)。

さて、ここで、シニフィアンという言葉について若干の説明をしておきたい。ジョルジュ・ムーナンのいらだちをまねいたように、ラカン理論におけるシニフィアンという概念<sup>(21)</sup>はソシュールのそれからは大きくずれている。シニフィアンは、シニフィエと対になって言語記号を構成する聴覚心像とは考えられていない。むしろ、ラカンのシニフィアンは、フロイトの〈表象〉、あるいは〈知覚記号〉に重なる概念である(藤田, 1993b, p. 15/Lacan, 1971=1986, p. 94)。ここでは、主にフロイトとラカンの理論をもとに独自の「シニフィアンの精神病理学」を展開している藤田博史の所説に従って、シニフィアンという概念を理解しておくことにする。

まず、シニフィアンはすべて知覚に起源を持っている。シニフィアンは、知覚に起源を持つすべての差異性であり、〈ものそのもの〉(物自体: カント/現実界: ラカン)<sup>(22)</sup>とは異なる〈なにか〉のデジタル・コピーである(藤田, 1993b, p. 14)。人間は身体として(知覚=運動として)世界を切り出していくが、切り出された世界はすでにシニフィアンである<sup>(23)</sup>。つまり、「わたしたちの知り得るすべては、すでにシニフィアン」(藤田, 1993c, p. 99)であり、「我々の日常の体験は身の回りのシニフィアンに関わる体験である」(小出, 1993c, p. 193)。テレビに例えれば、人間は元の電波(=〈ものそのもの〉)からほんの一部だけを選びだし、それを増幅して、シニフィアンを作り出し、それらを知覚しているのである(小出, 1993c, p. 193)。

ところで、シニフィアンは、知覚シニフィアンと言語シニフィアンに大別されるが、前述の原抑圧によって、主体が巻き込まれるシニフィアンの連鎖とは正確には言語シニフィアンの連鎖である。言語シニフィアンとは、他者から与えられることなしには、決してシニフィアンの系列には加わることのない、特殊なシニフィアンである(藤田, 1993b, p. 33)。つまり、主体は当初、自らの知覚によって、知覚シニフィアンとしての世界を切り出しているが、原抑圧によって、言語シニフィアンを受け取り、知覚シニフィアンとしての世界を変容させるのである。言語シニフィアンの侵入によって、知覚シニフィアンは再構成される(藤田, 1993b, p. 33)。よって、原抑圧以降主体が参入していくシニフィアンの世界(=象徴界)とは、正確には言語シニフィアンの世界であるとともに、言語シニフィアンによって再構成(再分節)された知覚シニフィアンの世界でもある。

なお、知覚シニフィアンはフロイトの〈物表象〉に、言語シニフィアンは〈語表象〉にそれぞれ対応する(藤田, 1993c, p. 88)。

【8】言語シニフィアンの系列には、それがなければ、各々の言語シニフィアンが好き勝手な方向に滑走し続け、支離滅裂なものになってしまうような一つの特異点がある(南, 1993, p. 71)。その特異点とは最初の言語シニフィアンとしての $\Phi = S 1$ である。すでに述べたように、 $\Phi$ は主体を $S 2$ に差し出した後、エスに押さえこまれ、無意識という心的領域が形成される。そして、それ以降、 $\Phi$ は言語シニフィアンの集合としての(大文字の)他者Aからは姿を消す。(ここから、 $\Phi$ は他者Aにおける欠如のシニフィアン $= S(A)$ (Lacan, 1960a(1966), p. 818=1981, p. 330)とも呼ばれる。)しかし、その後、 $\Phi$ は他のあらゆる言語シニフィアンのシニフィエの位置にとどまり、他の言語シニフィアンをすべて自らの隠喩として機能させる(藤田, 1993b, pp. 37~38)。 $\Phi$ はある言語シニフィアンが現われたとき、

そのシニフィエとして隠れることによってのみ、自己の存在を知らせるようなシニフィアン、つまり機能だけがあって、見ることはできないシニフィアンである（佐々木, 1983, pp. 150～151）。このようなΦの作用によって言語シニフィアンの集合＝他者Aは統一を得る。Φは、第3項として、商品世界における貨幣と同じような機能を、象徴界で果たすと言えよう。Φが他者Aから姿を消す過程（原抑圧の一つの過程）は、いわば今村仁司の言う第3項排除である（藤田, 1993c, pp. 16～19）。一つの意味にとどまることのない自己産出的なΦの意味作用（新宮, 1988, p. 128）によって統一を得た象徴界の中で、Sは果てしない欲望の運動を続けることが可能になる。また、言語シニフィアンによって再構成（再分節）された視覚シニフィアン（聴覚シニフィアンと並ぶ知覚シニフィアン）の全体＝「見えるもの」le visibleも、「見えないもの」l'invisibleとしてのΦの隠喩作用によって、まとまりを与えられている（藤田, 1990, pp. 170～173）。

【9】Φの隠喩作用によってまとまりを与えられたシニフィアンの世界＝象徴界の中において、Sが究極的に追求していることは、対象aと一体化することによって、享樂 jouissanceを獲得することである。ただ、前述のように、Sと対象aの間にはクッションとしてのシニフィアンがあり、それに対象aはラカンの言う現実界に属するものであるから、Sが対象aに到達することは到底不可能である。つまり、享樂は不可能である。しかし、同時に「主体は〈他者〉の欲望に導かれ「以前の状態への回帰」つまり「愛の対象（＝対象a）との一体化」を目指し、シニフィアンを構造化して意味を生成し、享樂を獲得している」（藤田, 1993a, p. 157）とされる。このくい違いは何であろうか。簡単に言うと、享樂という概念の違いである。対象aとの一体化によってもたらされる享樂は剰余享樂 le plus-de-jour と呼ばれ、これは個体の死によってのみもたらされる。死とは、Sが最終的な享樂を手に入れること、つまり、剰余享樂に到達することである（藤田, 1993a, p. 159）。Sが「構造化する運動」において獲得している享樂はこの剰余享樂ではない。<sup>(25)</sup> Sは象徴界において、剰余享樂の不可能性を宣告されている。しかし、象徴界は「一つの緩衝機構を備えた間接的な享樂の次元」あるいは「虚像としての享樂の可能性」（向井, 1993, p. 96）を造りあげ、Sをそこに誘っている。この享樂はΦの作用を受け、象徴化された享樂で、ファルスの享樂 jouissance phallique と呼ばれる。剰余享樂が象徴界の法の網をすりぬけた非合法の享樂であるのに対して、ファルスの享樂は象徴界により馴致された合法的な享樂である（小笠原, 1989, p. 129）。Sが獲得しているのはこのファルスの享樂である。<sup>(26)</sup> そして、このファルスの享樂をもたらしるのが対象aのルアーとしてのシニフィアンである。Sがシニフィアンを手繰りよせることによって生成する（広義の）意味の次元が身体の（広義の）性感領域と結びつくことによって生じる快がファルスの享樂である（藤田, 1990, p. 193）。私見によれば、ラカニアンにおいて、いわゆる快樂原則はファルスの享樂の原則を指すものと思われる。この原則の中にある限り本来的な享樂＝剰余享樂は失われている（cf. 新宮, 1993, p. 131）。「享樂は快樂原則の彼岸にある」（向井, 1988, p. 146）とは以上のような意味である。ラカンを引けば、「欲望は享樂の中へ制限を越えることに対する防衛である」<sup>(27)</sup>（Lacan, 1960a (1966), p. 825）ということになる。<sup>(28)</sup>

【10】最後に、本節で同一化と理想自我／自我理想に関する説明を加えて、次節で枠組みを確定しよう。

前述のように、主体は、（小）他者＝〈母〉との関係において、最初の自我＝想像的自我

を獲得していく。「主体は自分を同一視するのも、まずもって自分を体験するのさえも、他人のなかなかのである」(Lacan, 1946(1966), p. 181=1972, p. 244). そして、この疎外の過程が進行するのが鏡像段階であるとされる。しかし、(小) 他者との想像的同一化は「生後6カ月から18カ月までの期間」にのみ展開するわけではない。鏡像段階は想像的関係のスタートであり、その構造は一生続くとされる(佐々木, 1986, p. 152)。「主体の歴史というものは多かれ少なかれ典型的な一列の理想的同一化の内に展開する」(Lacan, 1946(1966), p. 178=1972, p. 240) のであるが、鏡像段階の想像的同一化は原抑圧以降も続けられることになる。<sup>(29)</sup>

では、それは誰を対象にしているのか。ここでは、とりあえず、南淳三の用語を借りてその対象を「隣人」Nebenmensch と呼ぶことにしたい。<sup>(30)</sup> 隣人とは、「原隣人」としての〈母〉の末裔であり、それは、「自分に似た、自分とは別個の人間としての、そしてその相手と無関係ではられない、他者である」(南, 1993, p. 75). この隣人との関係においては、彼(または彼女)に愛されるか拒絶されるかがクルーシャルな要件となる(南, 1993, p. 75).

(小) 他者との想像的同一化は、一回限りのものではない。主体が象徴界に参入した後にも上記のような隣人＝(小) 他者との想像的同一化は進行する。自我もそれにつれて生成する。テリー・イーグルトンによれば、「自我とは、私たちが外界のなかに自分と同一視できるものをみつけることによって、統一された自己性という虚構の意識を、いや増しに強めていくナルシスティックな過程にはかならない」(Eagleton, 1984=1985, p.254). (小) 他者との想像的同一化を幾重にも重ねた堆積、(小) 他者という薄皮が多層化した玉葱のようなものが自我である(Nasio, 1988=1990, p. 74). なお、「想像的同一化は、相手によってさまざまに変わる」(姉齒, 1993, p. 237). つまり、自我は異質な隣人との新たな同一化によって変容する可能性も持っている。自我は生成・変容する玉葱である。

さて、以上のように、想像的同一化は、鏡像段階を越えて進行するわけであるが、原抑圧以降は、さらに異なる形の同一化のプロセスが始まる。象徴的同一化がそれである。同一化をめぐる議論において、想像的同一化の対象＝(小) 他者は、理想自我 *moi idéal* と呼ばれ、*i* (a) と表記されるが、象徴的同一化の対象は、自我理想 *idéal du moi*＝*I* (a) である。理想自我／自我理想の概念はフロイトに起源を持つが、フロイトは両者を明確に区別していない(Laplanche & Pontalis, 1967=1977, p. 484). それに対して、ラカニアンは両者を区別して使用する。<sup>(31)</sup> *i* (a) は $\$$ にとって好ましいように見えるイマージュ、「こうなりたいと思う」ようなイマージュであるのに対して、*I* (a) はそこから見ると自らが好ましく見え、(日常的な意味での) 他者の愛を受けるのに相応しく見えるような場所である(Žižek, 1989=1992, p. 206). *I* (a) について、わかりやすく換言すれば、それは「社会の道徳的判断に一致する理想像」、「主体が他者の中に読み取る欲望に一致する理想像」であり(Lemaire, 1970=1983, p. 264), それに同一化することで、「主体は、*I* (a) の点から自己を見るようになり、その理想に適った自己の全体像をつくりあげ、これが自我となる」(向井, 1988, p. 105). *I* (a) との同一化によって、人間は、「社会的な成功の必要性を教えられ、かつ、自分をこれこれとして限定するであろう社会的承認のなかで自分の仕事の収穫を期待しつつ、社会規範の道を選び」、「自我は、身分や職業、種々の資格、そして社会的・政治的・文化的な集団への所属を身に纏う」(Lemaire, 1970=1983, p. 264) のである。<sup>(32)</sup> さらにつけ加えれば、*i* (a) は基本的に想像的なもの(イマージュ)であるのに対して、*I* (a) はシニ



フィアンによって象徴的に分節されている（藤田, 1993b, p. 128）.  $I(a)$  は  $i(a)$  を原器とし,  $i(a)$  が最初のシニフィアン  $\Phi = S1$  に照合されつつ, シニフィアンの鎧をかぶることによって構築されていくのである（藤田, 1993b, pp. 127～128）. また, 象徴的同一化の開始によって, 自我も象徴的に分節されることになる（想像的自我から象徴的自我へ）. 想像的同一化が, 想像的投射であるとするならば, 象徴的同一化は「私は何々である」というふうにシニフィアン, 言葉へ同一化することである（小出, 1990, p. 30）. 原抑圧以後, 自我は想像的自我と象徴的自我という二重の存在様式の間を揺れ動きながら, 生き延びてゆくことになる（藤田, 1993c, p. 151）.

なお,  $I(a)$  の形成と平行して,  $S$  の振る舞いを規定するもう一つの心的審級が作られてくる. 超自我 surmoi である. フロイトは超自我と  $I(a)$  との区別も厳密には行なわなかったが, ラカンによれば, まず, 前者は強制するもの (contraignant) であるのに対して, 後者は高揚させるもの (exaltant) である (Lacan, 1975, p. 118=1991a, p. 165). 超自我は  $S$  に対して命令や禁止を与え続けるが,  $I(a)$  は  $S$  を理想像にむけての行動に駆り立て高揚させるわけである. また, ジジエクが指摘するように  $I(a)$  と超自我は同一化の線によって隔てられる.  $I(a)$  は  $S$  の同一化によって自我を構成する審級であるのに対して, 超自我にはいかなる同一化的要素もない (Žižek, 1985=1992, p. 63).

【11】象徴界における  $S$  は自らの半身=対象  $a$  を喪失し, 「真の存在」を失った状態（構造的メランコリーの状態）にある. このような  $S$  にとって, 対象  $a$  に再び到達することが究極の課題である. しかし, 再三述べたようにそれは不可能である.  $S$  が手に入れることができるのは「代わりの対象」としてのシニフィアンである.  $S$  の存在欠如は（知覚シニフィアンを含めた）シニフィアンによって補填されているのである. ただ, その運動はランダムになされるわけではない.  $S$  がシニフィアンを手繰る運動は, 一定の方向性を持っている. そして, その方向性を与えるのが, 自我である. いや, もう少し正確に言おう. 対象  $a$  を究極的に目指す  $S$  は, それと知ることなく自らの存在根拠を自我に求めようとする. 対象  $a$  を原因ともする  $S$  の欲望は, 自らのアリバイを自我として（象徴的及び想像的に）構成していくのである（藤田, 1993c, p. 188）. そして, この自我のポジションから, シニフィアンを手繰る運動はなされる. さらに言えば, 自我の範例である  $I(a)$  と  $i(a)$  によって, シニフィアンを掴み続ける運動は方向性を与えられるのである. なお, 想像的自我は（小）他者の像が多層化した芯のない玉葱であり, 象徴的自我はシニフィアンで形づくられた一種の「張り子」（藤田, 1993b, p. 123）である. 自我は同一化の対象を「信じる」ことによってしか生き延びていけない「虚構」である. よって, 自我は自らの存続のために, 絶えず同一化の「実践」=自我の確認検査 *récolement du moi* (Lacan, 1949(1966), p. 97=1972, p. 129/藤田, 1993c, p. 249) を余儀なくされている. そして,  $S$  がシニフィアンを手繰る運動は, この自我の確認検査として営まれているとも言えるのである.

本稿が問題にする〈主体〉は,  $I(a)$  及び  $i(a)$  によって方向性を与えられた  $S$  が, 自我の確認検査としての「構造化する運動」を持続させている個体である. そして, 〈主体〉がどのような「構造化する運動」を行なうのかは, 当然,  $I(a)$  及び  $i(a)$  のあり方によって, 規定される. つまり, 次章以降で論じることになる〈主体〉の類型とは,  $I(a)$  及び  $i(a)$  のあり方によって, 区分される類型である. また,  $I(a)$  と  $i(a)$  によって,  $S$  が手繰るシニフィアンの世界が規定されることを考えれば, 〈主体〉の類型とは, 〈主

体) のファンタスムの構造の類型とも言えるであろう。<sup>(35)</sup>

# 註

- (1) この二つの概念はしばしば混同されている。例えば、柄谷行人は主体は何かに従属するという形でのみ生じるものであり、その起源が忘れられた時に、独立した自律的な主体という観念が形成されるという議論において、ラカンの主体概念における歴史性の欠落（従属という起源への言及の欠落）を批判しているが（柄谷, 1994a, p. 163）、ラカンの理論における主体は柄谷が当の議論において問題にしている〈主体〉（例えば、フーコーが牧人＝司祭型権力論において論じた〈主体〉）とはそもそも異なるものである。また、丹生谷貴志は「フーコーの自己」と「ラカンの主体」の差異について論じているが（丹生谷, 1994）、ここでも同様の混同が見られる。
- (2) そもそも、ラカンの理論は、体系たることをみずから放棄した理論であり、それは「その時々彼が取り組む諸問題に応じておのずと選ばれる諸展望の非体系的共存である」という見解もある（小笠原, 1989, p. 10）。
- (3) ラカンの理解をめぐるのは、「ほとんどの注釈者は、ラカンのテキストがもつ滑りに注意せず、意味の固定化にかまけている」（Gallop, 1985＝1990, p. 198）という批判があるが、我々はむしろこの「意味の固定化」を目指す方向で枠組みをまとめることになるだろう。
- (4) 上野千鶴子も指摘するように、普通に言う〈主体〉とは男性的な〈主体〉であり（上野・水田・浅田・柄谷, 1994, p. 32）、ここで列挙する〈主体〉もその例にもれない。よって、本稿で論じられる〈主体〉は（不本意ながら）男性的な〈主体〉に限定される。ジェンダー変数を取り込んだ〈主体〉論の展開は今後の課題である。
- (5) パルミエも個体の身体史の最初に「寸断された身体の苦悩」を据えている（Palmier, 1970＝1988, p. 29）。
- (6) ただし、正確には、鏡像段階とは「単に発達の一時期ではない。それは範例的な機能も持っている」（Lacan, 1975, p. 88＝1991a, p. 121）。鏡像段階は想像的關係のスタートでありその構造は一生続くとされる（佐々木, 1986, p. 152）。よく知られたシェーマLの図式（図1）は、この鏡像段階の構造を説明したものである。なお、このシェーマLにおいて主体は（E s）Sと表記されている。これはSujetの頭文字とエスを掛けたものである。このエスに重ね合わされるような「何か」としての主体（Lacan, 1981, p. 23＝1987a, p. 21/小笠原, 1989, p. 64）、すなわち鏡像段階の主体＝（E s）Sは、後述の△に相当するものである。
- (7) ラカニアン理論においては、人間は「（小）他者へ、そしてシニフィアンへと二重の疎外を被ったものとして描かれることになる」（鈴木, 1993, p. 187）。そして、この「私の二重の他者性は鏡像段階の出現と消失に相当」する（小出, 1984, p. 130）。ラカンの言葉でいえば、この二重の疎外と他者性とは、人間のhétéronomie radicaleである（Lacan, 1957(1966), p. 524＝1977, p. 277）。
- (8) クリステヴァは、主体が不安定な想像的關係から抜け出し、象徴界＝シニフィアンの世界に

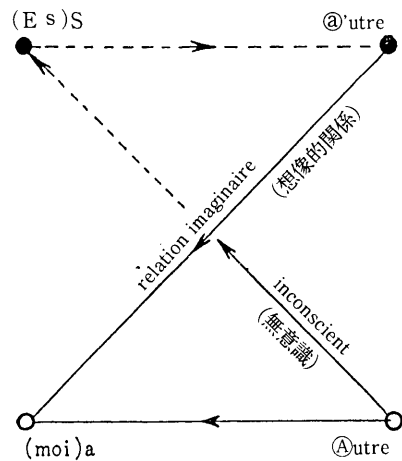


図1 シェーマL

参入する際の契機として、主体が自身といまだ完全に分離していない原初的母を「嫌悪を誘うおぞましきアブジェ abjet」として棄却する過程＝アブジェクション abjection の過程を措定している (Kristeva, 1981=1982, p. 40)。藤田博史は第三項排除論の枠内で、このアブジェクションの過程を原抑圧の下地を形成する段階として位置付ける議論を展開している (藤田, 1993c, pp. 11~38)。藤田の議論では原初的母は  $-\phi$  であり、 $-\phi$  の棄却とは  $-\phi$  が第三項として下方排除されることである。

- (9) この存在を認めないことが、ラカンの言う「排除」forclusionであり (小出, 1991, p. 170)、精神病の基本的事態である。なお、「排除」というと、日本語で「排除すること」と理解してしまいがちであるが、決して、主体の能動的な操作ではなく、あるもの、すなわち〈母〉を動かしているものが、ただの一度も象徴化されなかったということである (小川, 1987, p. 113)。
- (10) これは、「主体が象徴的水準において父というシニフィアンの実現化を引き受けること」(Lacan, 1981, p. 230=1987b, p. 80) である。
- (11) 原抑圧以前の主体たる「生の主体」=  $\Delta$  は、〈もの〉としての主体でもある (小笠原, 1989, p. 118/Lacan, 1960b(1966), p. 656=1981, p. 103)。〈もの〉とは、シニフィアンの外にあるものであり、いわば「無媒介なるもの」である。この表現できない、象徴化され得ない〈もの〉の領域が現実界であり、人間はまずこの現実界に誕生する (藤田, 1990, p. 315)。原抑圧以前の主体＝欲望の運動は現実界に属す〈もの〉であり、いまだ自らの姿を持たない。「生の主体」は、原抑圧以降、シニフィアンによって、その姿を与えられることになる。なお、「言語世界に入ってシニフィアンの効果としての主体となる前の神話的存在」(向井, 1988, p. 92) ともいえるべき、この「生の主体」は、「それが本当にあると言い切れるものなのかすら分かっていない」「理論上の主体」である (藤田, 1990, p. 52)。
- (12) 以上の過程を図式化したのが、ポワン・ド・キャピトン le point de capiton (図2) である (Lacan, 1960a(1966), p. 805=1981, p. 313)。なお、ラカンの直接の後継者の1人であるジャン＝ルイ・ゴーは、この主体の分裂 division subjective について、図3のような図式を呈示している。ゴーによれば、この図式は「シニフィアンが生命体 (vivant) を捕えた時に生じることがらを思い描くための一工夫」(Gault, 1986=1987, p. 77) である。この図式における「生の生命体」は生の主体に、「象徴的なものの効果」は原抑圧に、「シニフィアンの主体」は言表の主語に、そして、「享楽存在」は、「主体の存在のうちの生きている部分」(註16参照) たる言表行為の主体にそれぞれ相当する。

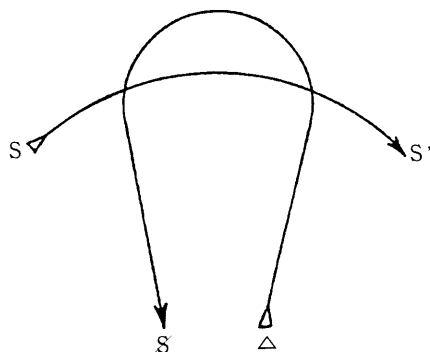


図2 ポワン・ド・キャピトン

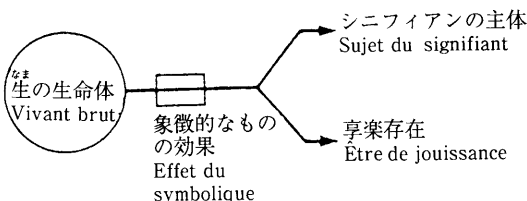


図3 主体の分裂

また、生の主体が分裂した主体へ転化することを、佐々木孝次は主体が私生児あるいは雑種

- =不純な存在 le bâtarde になることだと述べている。主体はシニフィアンによって、私生児、雑種として生みなおされるわけである（佐々木, 1984, p. 279）。
- (13) 対象 a は、 $\Phi = S1$  が  $\Delta$  に刻まれるときに生じる「裁ち屑」ないしは「廃棄物」とも表現される（小川, 1993, p. 26/向井, 1988, p. 215）。
- (14) ラカンは最初ハイデッガーの語彙から〈もの〉das Ding という用語を借用していたが（小笠原, 1989, p. 117）、セミナーⅦ（1959～1960）において、フロイトの「科学的心理学草稿」（1896）の中にも、同様の〈もの〉das Ding という概念を見いだすことになる（Lacan, 1986/Freud, 1896=1974, p. 263, p. 266）。そして、1960年以降のいわゆる後期ラカンの展開において対象 a という概念を使うようになる（向井, 1988, p. 6, p. 223）。
- (15) これは臨床的に事例化したメランコリーとは区別される。なお、加藤敏は人間の様々な行為は、どこかしらでこの構造的メランコリーの修復という要素を持つと指摘している（加藤, 1991, p. 9）。
- (16) より正確に言うと次のようになる。S は象徴内と象徴外に引き裂かれている（藤田, 1990, p. 71）。S の象徴外の部分は「主体の存在のうちの生きている部分」（Gallop, 1985=1990, p. 211/Lacan, 1958(1966), p. 693=1981, p. 157）であり、それは、いわば〈もの〉としての主体の生き残りである。つまり、S は現実界にその半身を残しているのである。しかし、対象 a とは現実界という境域を共にしながらも、S は対象 a とは永遠に一体化できぬ関係に置かれている。「それは同一平面上にありながらつねに裏表の関係に置かれ、決して同時に出現することのない相補的なトポロジックの関係である」（藤田, 1990, p. 68）。メビウスの帯における表と裏の関係がこのトポロジックの関係に相当する（小笠原, 1990, p. 130）。
- (17) ラカンによれば、「人間の欲望、それは他者の欲望である」（Lacan, 1960a(1966), p. 814=1981, p. 325/Lacan, 1961(1966), p. 628=1981, p. 63/Lacan, 1963(1966), p. 780=1981, p. 277）。
- (18) より正確には、S はシニフィアンに再現代理（représenter）された時点で、欲望する主体としては消失する。「今にも話す用意をしてそこにあったものは、もはやひとつのシニフィアンでしかなくなることによって姿を消すのである」（Lacan, 1964(1966), p. 840=1981, p. 365）。
- (19) ラカンがアレクサンドル・コジエヴを通してヘーゲルの『精神現象学』（1807）に接していたことはよく知られている（「コジエヴの思想はヘーゲル解釈というよりは、ヘーゲルを素材とした自由な創作と言うべきものである」（加藤尚武）という見解もあるが、この点についてはここでは立ち入らない）。ヘーゲルはフロイトを別にすれば『エクリ』（1966）の中でもっとも頻繁に引用される名前であり、また、その本当の影響は、あえてヘーゲルの名前を伏せているところにあるとされる（佐々木, 1984, p. 204）。ここで触れた主体の消失及び分裂という議論についても『精神現象学』の影響が指摘されており、特に、「自己疎外的精神、教養」の項の中の次のような文章がよく引き合いに出される。「言葉は、自己としての純粹自己の定在であり、言葉においては、自己意識そのものの自分で（対自的に）存在する個性が、現実存在となり、そのため言葉が他者のためのものとなる。言葉以外の仕方では、この純粹自我としての自我が、そこに在るということはない。それ以外のどの表現においても、自我は現実のなかに沈められており、自我が自分を取りもどするような形のなかに、沈められている。・・・言葉は、自我をその純粹な姿で含んでおり、言葉だけが、自我を、自我そのものを表現している。自我のこの定在は、定在としては、自らの真の本性を含んでいるような一つの対象態である。自我はこの自我であるが、また一般的な自我でもある。だからそれが現われることは、やはりそのまま、この自我の外化であり、消失である。そのため、自らの一般態のうちに止まることになる。自己を表現する自我は、聴きとられてしまったのである。つまり自我は、伝染して行くのであり、そのとき、自分を定在と認める人々と、そのまま一つになってしまっており、一般的自己意識となっているのである。・・・自己意識的な今として現に在るとき、現に

在るのではなく、消失によって現に在るという、このことこそ、自我の定在なのである。だから、かく消え去ること自身が、そのまま自我が持続することである。」(Hegel, 1807=1966, p. 294) この文章における「自我」とはもちろんラカニアン理論における自我ではなく、主体に相当する。「言葉」はシニフィアンであり、「この自我」は言表行為の主体＝欲望の主体、「一般的な自我」は言表の主語にそれぞれ相当するであろう。「この自我」が外化し、消失することによって、「自我」が持続していくという事態は、まさに $\$$ がアファニシスを繰り返すことによって生き延びていくという事態として考えることができる。ラカンが呈示した主体とシニフィアンの関係についての基本的な構図は、以上のように、ヘーゲルの言語論の中に見いだすことができるのである(佐々木, 1984, p. 230)。

- ②0 個体のファンタスムの構造は、精神分析の場面において明らかにすることができるとされる(藤田, 1993c, p. 279)。また、ファンタスムの構造を明らかにすることは、欲望の基本ヴェクトルを解析することでもある(藤田, 1993b, p. 83)。
- ②1 シニフィアンという概念は、ラカンがセミナーⅢ(1955~56)において精神病という主題を扱いはじめた時に本格的に導入されている(cf. 赤間, 1993, pp. 178~179)。
- ②2 日本のラカン解釈においては、カントの物自体とラカンの現実界を重ね合わせる議論があり(例えば, 木村, 1991, p. 30/柄谷, 1994b, p. 12)、ここではそれにならって、両者を並記したが、正確に言えば、両者の間には大きな差異がある。例えば、「現実的なものは、認識論が勝手に思い込んでいるような、冷静で中立なものではなくて、激しい情動を伴っていて、快感原則にしたがって、意識に入る以前に無意識の意味の連鎖に入って、言語の構造に振り分けられてしまう」(小川・阿部, 1992, p. 178)ようなものである。
- ②3 あるいは「シニフィアンが現実そのものを切り出している」(Lacan, 1981, p. 283=1987b, p. 156)。
- ②4 この点についてのくわしい議論は、「眼差し」論(Lacan, 1973, pp. 65~109/藤田, 1993b, pp. 107~115)として展開されているが、ここでは立ち入らない。
- ②5 分裂病においては、「父の名」のシニフィアンたる $\Phi$ が「排除」されており、この「有りうべからざる享楽」=剰余享楽が症状として回帰している(小出, 1991, p. 37)。
- ②6 剰余享楽の不可能性を宣告された $\$$ がファルスの享楽を獲得することについて、スクリャーピンは次のように言っている。「シニフィアンが、身体から「もの」の喜びを追いついてしまったのだとしたら、話すことから、決して喜びが発散してこないことになります。したがって、話す主体を奮い立たせるためには、別の満足が必要になります。それは、言語活動とないまぜになっているような喜び、すなわちファリックな喜びです。」(Skriabine, 1987=1989, p. 375: この訳文では jouissance が「喜び」と訳されている)

なお、ファルスの享楽はとりわけ男性の欲望に緊密に結び付いた享楽であり、ラカンによれば、女性はこのファルスの享楽を越えた「もう一つの享楽」を得ていると言う。「女性はまるでファルスの享楽の彼岸へと至り、その限界に完全に従うことなく「それ以上の」何かを得るかのようである」(Benvenuto & Kennedy, 1986, p.192=1994, p. 232)。ラカンはセミナーXX(1972~1973)において、この問題を取り上げているが、女性が得ている「もう一つの享楽」がどのようなものであるかについて、精神分析は何も答えていないし、女性分析家も何も考えてくれないと指摘している(鈴木, 1991, p. 228)。

- ②7 現在出ている日本語訳では、この部分は次のように訳されている。  
「欲求は、ひとつの防衛、つまり快の享受のなかで限界を越えようとする防衛だからである。」(Lacan, 1960a(1966)=1981, p.339)

「欲求」という訳語の問題は別にしても、これは誤訳であろう。原文は、次の通りである。

le désir est une défense, défense d'outre-passer une limite dans la jouissance. (Lacan,

1960a(1966), p. 825)

- (28) ラカンは次のようにも言っている。「〈エロス〉によって生命は、みずからの腐敗に至る猶予の期間、享楽を延長する」(Lacan, 1956(1966), p. 486=1977, p. 228)
- (29) 言いかえると、鏡像段階から発展した想像的關係は、大人の対人関係にも及ぶのである (Benvenuto & Kennedy, 1986, p.81=1994, pp. 96~97)。
- (30) さらに言えばこの用語は、南がフロイトの「科学的心理学草稿」から借用したものである (cf. Freud, 1896=1974, pp. 265~266)。
- (31) なお、ラカニアンではない小此木啓吾も、ラカンによる理想自我と自我理想の区別を受け入れた上で (小此木, 1981, pp. 134~135), 自らの「自己愛人間論」を展開している。
- (32) ラカンは、初期の家族論のテキストにおいて、いわゆる傑出人の家系というのは、この自我理想の伝達によるのであり、遺伝によるのではないと述べている (Lacan, 1938=1986, p. 105)。
- (33) 晩年におけるブリットとの共著『ウッドロー・ウィルソン』においても、両者は明確に区別されていない (Freud & Bullitt, 1967=1969, pp. 47~50)。
- (34) なお、超自我には通常知られているものとは異なるもう一つの形態がある。ナシオが専制的超自我 *surmoi tyrannique* と呼ぶものがそれである。原始的外傷を起源とする専制的超自我は道徳的掟を保証する良心として命令や禁止を発するのではなく、*Σ*に強度の快を強制する倒錯的な扇動者である (Nasio, 1988=1990, pp. 206~211)。種々の破壊的、自壊的行為の誘導因となるこの心的審級は、最終的に*Σ*を、快の彼岸、ファンタスムの向こう、つまり剰余享楽に導こうとする。*Σ*に「享楽せよ!」と命じる専制的超自我はいわば「死の欲動」に満ちているのである (cf. Freud, 1923=1970, p. 295)。さらに言い換えれば、専制的超自我とは*Σ*に現実的同一化を強制する審級である。現実的同一化とは、対象*a*との一体化をアクティング・アウト (想像や言葉を介さないいわば駆り立てられた直接行動) によって遂行しようとするものであり、すべての人間が潜在的にかかえている同一化の様式である (藤田, 1993c, p. 239)。専制的超自我は、*Σ*が陥っている構造的メランコリーを現実的同一化によって一挙に修復しようとする心的審級と言える。
- (35) 【7】で述べたように、ファンタスムは各〈主体〉に固有のものである。しかし、その類型を考えることは可能であると我々は考える (詳細は次章以降の議論を参照)。

## 文 献

- 赤間啓之 1993「声と文字のキマイラ：フランス精神分析のファルス」、『批評空間』, No.11
- 姉齒一彦 1993「同一化・同一性」, 小出浩之編『ラカンと精神分析の基本問題』, 弘文堂
- Benvenuto, B. & Kennedy, R. 1986 *The Works of Jacques Lacan : An Introduction*, London, Free Association Books. =1994小出浩之・若園明彦訳『ラカンの仕事』, 青土社
- Clément, C. 1981 *Vies et Légendes de Jacques Lacan*, Paris, Grasset & Fasquelle. =1983市村卓彦・佐々木孝次訳『ジャック・ラカンの生涯と伝説』, 青土社
- Eagleton, T. 1984 *Literary Theory : An Introduction*, Oxford, Basil Blackwell. =1985大橋洋一訳『文学とは何か』, 岩波書店
- Foucault, M. 1966 "La pensée du dehors", *Critique*, juin. =1978豊崎光一訳「外の思考」, 『外の思考：ブランショ・バタイユ・クロソウスキー』, 朝日出版社
- Freud, S. 1896 *Entwurf einer Psychologie*. =1974小此木啓吾訳「科学的心理学草稿」, 『フロイト著作集7』, 人文書院
- Freud, S. 1923 *Das Ich und das Es*, Internationale Psychoanalytischer Verlag, Leipzig, Wien. =1970井村恒郎訳「自我とエス」, 『フロイト選集 第4巻 自我論』, 日本教文社
- Freud, S. 1926 *Hemmung, Symptom und Angst*, Internationale Psychoanalytischer Verlag, Leipzig,

- Wien. = 1969加藤正明訳「制止・症状・不安」, 『フロイド選集 第10巻 不安の問題』, 日本教文社
- Freud, S. & Bullitt, W. C. 1967 *Thomas Woodrow Wilson : A Psychological Study*, London, Weidenfeld & Nicolson. = 1969岸田秀訳『ウッドロー・ウィルソン』, 紀伊國屋書店
- 藤田博史 1990『精神病の構造：シニフィアンの精神病理学』, 青土社
- 藤田博史 1993a『性倒錯の構造：フロイト／ラカンの分析理論』, 青土社
- 藤田博史 1993b『幻覚の構造：精神分析的意識論』, 青土社
- 藤田博史 1993c『人間という症候：フロイト／ラカンの論理と倫理』, 青土社
- Gallop, J. 1985 *Reading Lacan*, Ithaca, Cornell University Press. = 1990富山太佳夫・椎名美智・三好みゆき訳『ラカンを読む』, 岩波書店
- Gault, J. = L. 1986 "La structure freudienne des psychoses". (1986年8月10日, 京都における講演) = 1987新宮一成訳「精神病のフロイトの構造」, 『臨床精神病理』, 第8巻第1号
- Hegel, G. W. F. 1807 *Phänomenologie des Geistes*. = 1966檉山欽四郎訳『精神現象学』, 河出書房
- 石田浩之 1992『負のラカン：精神分析と能記の存在論』, 誠信書房
- 柄谷行人 1994a「双系制をめぐる」, 『〈戦前〉の思考』, 文藝春秋
- 柄谷行人 1994b「カント的転回」, 『現代思想』, 3月臨時増刊号
- 加藤敏 1991「主体の死と構造的メランコリー」, 『imago』, 6月号
- 木村敏 1991「分裂病について 2」, 『imago』, 8月号
- 小出浩之 1984「解説に代えて」, 『岩波講座 精神の科学・別巻』, 岩波書店
- 小出浩之 1990『分裂病と構造』, 金剛出版
- 小出浩之 1991『続 分裂病と構造』, 金剛出版
- 小出浩之 1993a「ラカンによる無意識の探究：ボロメオ結び」, 『岩波講座 現代思想 3 無意識の発見』, 岩波書店
- 小出浩之 1993b「原抑圧：その二重の側面と、分裂病者の二重見当識」, 小出浩之編『ラカンと精神分析の基本問題』, 弘文堂
- 小出浩之 1993c「精神分裂病と薬物療法」, 『臨床精神病理』, 第14巻第3号
- Kristeva, J. 1981 "La relation d'amour et la représentation : à la lumière de la théorie psychanalytique". (1981年10月26日, 京都大学における講演) = 1982三浦信孝訳「愛の関係と表象：精神分析理論に照らして」, 『現代思想』, 1月号
- Lacan, J. 1938 "La famille : le complexe, facteur concret de la psychologie familiale", *Encyclopédie Française*, Paris, Larousse. = 1986宮本忠雄・関忠盛訳『家族複合』, 哲学書房
- Lacan, J. 1946(1966) "Propos sur la causalité psychique", *Journées psychiatriques de Bonneval*, 28 septembre 1946. (paru dans *Écrits*, Paris, Seuil, 1966) = 1972宮本忠雄訳「心的因果性について」, 『エクリ I』, 弘文堂
- Lacan, J. 1949(1966) "Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je", *Revue française de psychanalyse*, tome 13, no. 3. (paru dans *Écrits*) = 1972宮本忠雄訳「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」, 『エクリ I』, 弘文堂
- Lacan, J. 1956(1966) "Situation de la psychanalyse et formation du psychanalyste en 1956", *Études philosophiques*, no. 4. (paru dans *Écrits*) = 1977早水洋太郎訳「一九五六年における精神分析の状況と精神分析家の養成」, 『エクリ II』, 弘文堂
- Lacan, J. 1957(1966) "L'instance de la lettre dans l'inconscient ou la raison depuis Freud", *La psychanalyse*, no. 3. (paru dans *Écrits*) = 1977佐々木孝次訳「無意識における文字の審級, あるいはフロイト以後の理性」, 『エクリ II』, 弘文堂
- Lacan, J. 1958(1966) "La signification du phallus", *Institut Max Planck*, Munich, 9 mai 1958.

- (paru dans *Écrits*) = 1981佐々木孝次訳「ファルスの意味作用」, 『エクリⅢ』, 弘文堂
- Lacan, J. 1960a(1966) "Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien", Congrès de Royaumont, 19-23 septembre 1960. (paru dans *Écrits*) = 1981佐々木孝次訳「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」, 『エクリⅢ』, 弘文堂
- Lacan, J. 1960b(1966) "Remarque sur le rapport de Daniel Lagache : «Psychanalyse et structure de la personnalité»", Colloque international de Royaumont, 10-13 juillet 1958. Retravaillé pour la publication et daté de Pâques 1960. (paru dans *Écrits*) = 1981佐々木孝次訳「ダニエル・ラガーシュの報告「精神分析と人格の構造」についての考察」, 『エクリⅢ』, 弘文堂
- Lacan, J. 1961(1966) "La direction de la cure et les principes de son pouvoir", *La psychanalyse*, no. 6. (paru dans *Écrits*) = 1981海老原英彦訳「治療の指導とその能力の諸原則」, 『エクリⅢ』, 弘文堂
- Lacan, J. 1963(1966) "Kant avec Sade", *Critique*, no. 191. (paru dans *Écrits*) = 1981佐々木孝次訳「カントとサド」, 『エクリⅢ』, 弘文堂
- Lacan, J. 1964(1966) "Position de l'inconscient", Congrès de Bonneval, 31 octobre-2 novembre 1960, condensée en mars 1964. (paru dans *Écrits*) = 1981佐々木孝次訳「無意識の位置」, 『エクリⅢ』, 弘文堂
- Lacan, J. 1971 "Lituraterre", *Littérature*, no. 3. = 1986若森栄樹訳「リチュラテール」, 『ユリイカ』, 12月号
- Lacan, J. 1973 *Le Séminaire Livre XI : Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Paris, Seuil.
- Lacan, J. 1974 *Télévision*, Paris, Seuil. = 1992藤田博史・片山文保訳『テレビジョン』, 青土社
- Lacan, J. 1975 *Le Séminaire Livre I : Les écrits techniques de Freud*, Paris, Seuil. = 1991a 小出浩之・小川豊昭・小川周二・笠原嘉訳『フロイトの技法論 上』, 岩波書店 = 1991b 小出浩之・鈴木國文・小川豊昭・小川周二訳『フロイトの技法論 下』, 岩波書店
- Lacan, J. 1981 *Le Séminaire Livre III : Les Psychoses*, Paris, Seuil. = 1987a 小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳『精神病 上』, 岩波書店 = 1987b 小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳『精神病 下』, 岩波書店
- Lacan, J. 1986 *Le Séminaire Livre VIII : L'éthique de la psychanalyse*, Paris, Seuil.
- Laplanche, J. & Pontalis, J.=B. 1967 *Vocabulaire de la Psychanalyse*, Paris, PUF. = 1977村上仁監訳『精神分析用語辞典』, みすず書房
- Lemaire, A. 1970 *Jacques Lacan*, Bruxelles, Charles Dessart. = 1983長岡興樹訳『ジャック・ラカン入門』, 誠信書房
- Margulis, L. & Sagan, D. 1992 *Mystery Dance : On the Evolution of Human Sexuality*, New York, Brockman. = 1993松浦俊輔訳『不思議なダンス：性行動の生物学』, 青土社
- 南淳三 1991「フロイト『科学的心理学草稿』から考える精神病」, 『imago』, 6月号
- 南淳三 1993「妄想の不動点としての身体的なもの：においパラノイアの一例から」, 『臨床精神病理』, 第14巻第1号
- 向井雅明 1988『ラカン対ラカン』, 金剛出版
- 向井雅明 1993「神の女, シュレーバー」, 『imago』, 2月号
- Nasio, J.=D. 1988 *Enseignements de 7 concepts cruciaux de la psychanalyse*, Rivages. = 1990榎本讓訳『精神分析7つのキーワード』, 新曜社
- 丹生谷貴志 1994「歴史的編成と現実界の普遍化：フーコー的自己とラカンの主体の差異をめぐって」, 『imago』, 2月臨時増刊号



- 大庭健 1986「近代的〈孤人〉の消息：構造主義批判は何であってはならないか」, 専修大学現代文化研究会編『近代の人間の現況』, 勁草出版サービスセンター
- 小笠原晋也 1989『ジャック・ラカンの書：その説明のひとつの試み』, 金剛出版
- 小笠原晋也 1990「ナルシシズムと主体の分裂」, 大黒祥孝・松本雅彦・新宮一成・山中康裕編『青年期, 美と苦悩』, 金剛出版
- 小川豊昭 1987「幻聴における主体の構造」, 『臨床精神病理』, 第8巻第2号
- 小川豊昭 1993「原幻想と音韻連鎖」, 小出浩之編『ラカンと精神分析の基本問題』, 弘文堂
- 小川豊昭・阿部あや 1992「運命のロンド：テュケーとアブジェクション」, 『imago』, 3月号
- 小此木啓吾 1981『自己愛人間：現代ナルシシズム論』, 朝日出版社
- Palmier, J. = M. 1970 *Lacan*, Éditions Universitaires. = 1988岸田秀訳『ラカン』, 青土社
- 坂部恵 1979『人類の知的遺産 43 カント』, 講談社
- 佐々木孝次 1983「性のディスカール：去勢の普遍性と身体の相違」, 『現代思想』, 8月号
- 佐々木孝次 1984『ラカンの世界』, 弘文堂
- 佐々木孝次 1986『幻影のディスカール』, 福武書店
- 新宮一成 1988『夢と構造』, 弘文堂
- 新宮一成 1990「ラカンと夢分析」, 小出浩之編『ラカンと臨床問題』, 弘文堂
- 新宮一成 1993「夢と無意識の欲望：享樂する主体, 消え去る主体」, 小出浩之編『ラカンと精神分析の基本問題』, 弘文堂
- Skriabine, P. 1987 "À propos du sujet lacanien". (1987年ル・シャン・フロイディアン日仏グループ講演会における報告) = 1989新宮一成訳「ラカンの主体について」, 『臨床精神病理』, 第10巻第4号
- 鈴木國文 1991「女性という謎と精神分析」, 『imago』, 3月号
- 鈴木國文 1993「精神医学における部分と全体：錯綜した因果論の中で」, 『臨床精神病理』, 第14巻第3号
- 上野千鶴子・水田宗子・浅田彰・柄谷行人 1994「日本文化とジェンダー」, 『批評空間』, II - 3
- Žižek, S. 1985 "Sur le pouvoir politique et les mécanismes idéologiques", *Ornicar ?*, no. 34 = 1992 柏木治訳「政治権力とイデオロギーのメカニズム」, 『imago』, 7月号
- Žižek, S. 1989 *The Sublime Object of Ideology*, Verso. = 1992鈴木晶訳「イデオロギーの崇高な対象 第2部 = 他者の欠如②」, 『批評空間』, No. 7